

絆 求 め て

5月10日発行

文責 幼児教育専門員 久保田学



資質向上講座「講演会」を実施しました！

令和4年4月13日(水)、信州大学医学部子どものこころの発達医学教室教授 本田 秀夫先生を講師としてお迎えし、資質向上講座(講演会)をWEBで実施しました。テーマは、「発達障害の個性を生かした保育と子育て支援」で、発達が気になる子どもを捉える視点、特性とその対応、可能性の芽を育てるために、インクルーシブの理念と教育、保護者支援について、具体的な事例やその対応についてお話をいただきました。園での活動が一段落した16時からの研修だったこともあり、367名と大勢の先生方にご参加いただくことができました。以下に研修後のレポートでお書きいただいた内容を紹介します。

＜研修から学んだこと＞*今回は、一人の先生のレポートをの内容を掲載させていただきました

＜子どもの行動をどう捉えるか＞

- ・子どもの発達が気になるのは、その子の行動が「普通とは違う」と感じる時。気になる要素は、しばしば複数に亘るため、1つの診断(発達障害のカテゴリー)にとらわれずに、子どもを見ることが必要。
- ・普段、「普通」を基準に子どもを見ていることが多いため、他の子がやっているのにやらない、他の子がやらないことをやる、他の子と別のことを考えていると捉えがちである。「普通」になろう、させようとする事で、やりたくないのにやらなければと無理をする「社会的カモフラージュ行動」をとることで、メンタルヘルスをやられてしまうことがあるため要注意。発達障害の特性が目立つかどうかは、社会適応の良さと必ずしも比例しない。発達障害が目立たなくても、社会適応しづらい場合もある。
- ・教育分野では「繰り返し時間をかけて量をこなせば必ずできるようになる」という幻想があるが、絶対にあり得ないことである。やらなかったりサボったりして見えるのは、課題がその子に合っていないからである。発達障害の特性は、成長するにつれて軽減されていくこともあるが、知能は大幅に上昇はせず、ぼんやりミスなども残る。子どもの特性はかなり多様性があり、様々な領域が均等に伸びるわけではない。ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の考え方で個々への対応を考えるべき。
- ・全てが平均的になるのが正しいという捉え方は間違えて、偏りがあるのが人間であり、いい人生を送らせたいなら、得意なことをやらせてあげたい。だから、自然体の子育てをしていきたい。その子にとって不自然な子育ては、教育の悪循環を呼び、強く叱るなど、虐待に繋がる恐れもある。
- ・1度叱って止められる場合は良いが、何度叱っても止められない場合は、叱っても分からないため、次に繋がらない。その様な場合はスルーして別のことへ興味を向ける用にする事で2次障害へ向かう悪循環を防ぐ。

＜よりよい発達へ向かう教育のあり方＞

- ・「せめてこれくらい」はと、完璧を目指して「早くやれ」「正確にやれ」はNG。アンテナを広げて吸収していくのが学びであり、幼児の生活は殆どが遊びでその中で少しの学びがあることが望ましい。だから、しなくてよいことを決めて、苦しめない環境を作る。また、いつも同じ環境で安心できるという法則性が大事である。
- ・手立ては問題行動が起こってから考えるのではなく、問題の行動が起こらないように前もって行う。
- ・発達障害の子どもたちの自律を育てるために、自分ではできるかできないかを見極める。自発的にどのようなことをやりたがるのか、子どもの本当に楽しいことや好きなことを見極めて把握することがアセスメントのポイントであり、意欲を育てるコツである。
- ・自律スキルとソーシャルスキルの両立の鍵は合意である。命令、放任では育たない。提案をして、それに同意することで合意形成がなされる。その際に、視覚的構造化を図ることが有効。
- ・拘りは、命の危険や犯罪になる行為は対応すべきであるが、安全で誰も困らないものは放っておいてよい。拘りは目に触れなければこだわることもない。また、放っておけばそのうち飽きる。でも、癩癩を起こした場合は許可する事で悪化する。癩癩は予防が大事。起こってしまったら何もしないでおさまるまで待つ。

<インクルージョンの理念と教育>

- ・「みんな一緒に同じこと」ではなく、全ての人が居心地良く参加できるように、ときにオーダーメイドの支援をするというのがインクルージョン。「同じことをする」という価値観を崩さなければ行えない教育。「同じ」「共に」ではなく、「そばで」も許容する。
 - ・ユニバーサルデザインを利用することで、発達障害以外の子にも分かりやすくなる。
 - ・その子の行動特性が分かれば、診断がなくても個別の配慮はできる。
- * 幼児期に無理に食べさせると大きくなってから弊害がでる。そのため、無理には食べさせない。
* 否定文を使わず、肯定文で指導する。

<保護者との連携のあり方>

- ・保護者が発達障害に気付き、焦ると2次障害のリスクが高まる。焦ると「普通」に近づけるための努力をしてしまい、子どもが辛くなる。「小学校に上がるまでにはせめて〇〇ができるようになって欲しい」は要注意。
- ・自然体で育てられるよう、また得意な領域を伸ばせるよう、保育者が保護者へ子どもの好きなことや素晴らしい面を伝えていくことで、子どもを肯定的に合うことのできる関係性を構築すれば、苦手な領域があることも伝えやすくなる。
- ・保護者側の育てにくさを念頭に置き、子どもの特性と保護者のタイプ、更に両者の相互関係を総合的に評価し、包括的な支援プランを立てていく。保護者が安心して自然体で子どもと向き合えるよう、担任が中心となった職種を超えたチームで親子を支えていくことが重要。
- ・今後の支援の考え方として、発達は一律でなく多様であること、発達の座標をノルマにせず、個々の特性に応じた育て方をすべきことを全ての保護者に啓発することが大事になってくる。

<今後の保育実践に生かしたいこと>

- 障害のある子どもに限らず注意をするときには肯定文での注意が効果的ということを学んだため、保育実践で活かしていきたいと感じた。例えば重ねてある椅子に登ろうとするなど危険な行為を見つけた時に「危ないからダメ」と否定文で注意するのではなく、「椅子が崩れたら危ないから降りてほしいな」というように、単にダメと伝えるだけでなく、どうなってしまうからこうしてほしいということを明確に伝えていきたいと感じた。また写真や絵を貼って視覚的構造化を取り入れることで活動の見通しが立ちやすくなる。朝の準備のように毎日必ず行うことから取り入れていきたいと感じた。
- 障害のある子に対しての丁寧なかかわりや話し方は、すべての子に対してもわかりやすい関わりとなるため心掛けていきたいと思った。特に低年齢の子と関わる機会が多いため意識していきたい。それで必要のない関りは減らしながら関わっていきたい。
- 発達障害の子どもに対して、せめてこのくらいと完璧をめざさないことや、しなくてもいいことを決める、子どもと先生が合意すること、命令ではないということのを頭に置いて保育にあたる。見ていたら子どもがやりたくなるような行動、視覚的構造化を、十分に取り入れていく。かんしゃくに対しては、起こらない環境、予防をしていく。「みんなと一緒に」の活動には、同じ、共に、そばで、を子どものタイプに合わせて対応をしていく。発達障害の子にわかりやすい環境は、発達障害以外の子にもわかりやすいということ。ユニバーサルデザインの適切な取り入れ。保護者への対応については、心情、心理、願い、を理解した上で保護者のタイプに合わせて、伝え方を考えて対応する。チームで対応をしていく。大切な子どもたちの未来のために実践に活かしていきたいと思います。

今回研修の講師をお勤めいただいた、本田秀夫先生からご本をお送りいただきました。先生の著書である、「子どもの発達障害 ～子育てで大切なこと、やってはいけないこと～」(SB新書)です。この本には、今回の研修で先生がお話くださった内容が多くふれられています。第1章「発達障害の子育てを考える」では、子どもの行為への対応の仕方が、クイズ形式になっています。また、第3章には、「発達障害の子のほめ方・叱り方」にふれられています。日頃保育者が子どもの対応で迷ったり、不安に感じたりする内容についてアドバイスが多く書かれています。興味のある先生は、お読みいただくと良いのではないかと思います。(専門員)